
残念すぎる最後を迎えた男の物語

ムタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残念すぎる最後を迎えた男の物語

【Nコード】

N8811M

【作者名】

ムタ

【あらすじ】

これは高二の夏に残念すぎる最期を迎えたオタクの話。

第0話 死因は車じゃない（前書き）

駄文で処女作ですが精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。

第0話 死因は車じゃない

高校二年生の夏、補修が終わって家に帰ろうとしていた。

欲しいものや用事もなく、寄り道をする必要がなかったから家に一直線で帰る予定だった。

だが、帰り道の途中にある横断歩道の前まで来てその光景が目に入った。

赤信号。

歩くおばあちゃん。

横から来る車。

たぶん、考えるより先に体が動いたと思う。

その場から思いっきりダッシュ。横断歩道のと真ん中にいたおばあちゃんを突き飛ばした後すぐに、右横から衝撃が走った。初めての交通事故。僕の初体験はアナタでしたか。

そのまま何メートルか飛ばされると、そこは公園だった。

「あー・・・俺死ぬのな・・・」的な事を考えていると、三輪車に乗った小さな男の子が現れた。

どうしたの？と声をかけようとしたが、口からはゼヒューゼヒューとしか出ず、ついには血を吐き出してしまった。

そんな俺を見てどう思ったのか、男の子はそのまま三輪車で俺の胸を轢いて通り越した。さだコイツ。

その瞬間、俺の左胸の中の“何か”が止まった気がした。

だんだん視界が狭くなってきた。耳も遠くなってきた。感覚もなくなってきた。ヤバイ。これはヤバイ。

このままじゃ死んでも死にきれない。できることなら、死ぬ前に一度

「迷い猫オーバーラン最終巻を読みたかった・・・」

あ、今声出た。

そして俺の意識は途絶えた。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない（前書き）

今回いつきに飛びます。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない

結果から言くと、俺は新たに有馬^{ありま} 瑞希^{みずき}（男）として生まれ変わった。

いわゆる輪廻転生、というやつだ。

この名前を初めて聞いた時は、とあるPCゲームの主人公と、殺人料理を作る桃髪のヒロインを思い出した。

誕生日は転生前と同じ五月、生まれは鈴音町^{すずのねちょう}だ。

今思えば、鈴音の名を聞いた時に気が付けばよかったと後悔している。

黒髪ロング。顔は・・・女顔だ（しかも結構美人・・・）。

初めの頃は母のおふざけで女の子用の服を着させられているのだと思っていたのだが、小一になっても着させようとしていたので流石に分かった。

その時、母は心底残念そうな顔で舌打ちした。それが親のする事が、母よ。

六歳の夏、父方の祖父の知人がやっている施設に行ったった事がある。村・・・なんとか学園だったと思う。

そこで一人の女の子と出会った。

女の子は学園内の公園でひとりブランコで遊んでいた。

暇だったからだと思う。俺は女の子に聞いた。

「一人で遊んでいるの？」

「・・・うん」

「他の子と遊ばないの？」

「・・・」

女の子は答えなかった。だから俺は

「じゃあ僕と一緒に遊ぼうよ！」

と誘った。我ながらクサイセリフだったと思う。その時は「まあ、俺今子供だし

いや」で済ましていた。

そしたら「え、いいの？」的な視線を向けてきたので元氣よく頷くと女の子は立ち上がって

「・・・じゃあ、あそぼ」

と言った。

女の子は「・・・やのぞみ」と自己紹介してくれた。俺はのぞみちゃんと呼ぶことにした。

ただ、俺が自己紹介をした後「みずき、ちゃん？」と勘違いされた時はかなりダメージを受けた。

のぞみ は みずき に 1000 の ダメージ を あたえた
！

辺りが暗くなるまでのぞみちゃんと二人で遊んでいた。（もちろん誤解は解いた）

帰る事になった時、のぞみちゃんが

「また、あそんでくれる？」

と聞いてきたので、髪を結んでいた（両親から「髪は切るな！腰まで伸ばせ！」と言われていたので、その時はポニーテールにしていた）青いリボンを二つ渡して

「うん、いいよ」

と返事をした。その時に見せてくれた笑顔は今でも鮮明に覚えている。

その後十年間、俺はのぞみちゃんと一度も会えなかった。

だが次に会うまでの間、俺は忘れていた。

彼女が霧谷^{きじや}_{のぞみ} 希であることを。

中二の自然教室で、自分の隠れた才能を発見した。

声マネである。

いや、それはもうボイスチェンジと言えるモノであった。

何せ、髪をツインテールにし、伊達眼鏡を掛け、声を水城奈にし
て登校したら、注目はされるわ、告白されるわ、ナンパされるわで
大騒ぎ。だれも気付いてくれないのね・・・。

変装を解いて教室に入ると、クラス中が「ツインテ眼鏡っ子美少女
で声が水城奈　の転校生」の噂で持ちきりだったくらいだ。

ちなみに、クラス全員にネタバレしたら

「なんだって?!」

「チクシヨウ!」

「一瞬でもカワイイと思った俺がバカだった!」

「俺の初恋を返せ!」

「男のくせに!」

「女装男に負ける私達って・・・」

「なんか納得いかなーい!」

等々、カオスな事になってしまい、一時間目ができなくなってしまう
った。先生ゴメン。

その後、隣のクラスの安川という男子に「男の娘ボイスチェンジャ

ー」という不名誉なあだ名を貰った。orz

いきなり話が変わるが、高校入学一週間前に両親が亡くなった。死因は交通事故らしい。

なんでも轢かれそうになった人を二人で助けようとしたらしい。俺の親らしい行動だと思う。

その時俺は事故った相手を恨む訳でもなく、悲しむ訳でもなく、ただ「ああ、またか」という感想しか浮かばなかった。

転生前も両親は交通事故で亡くなっている。まあ転生後の両親みたいな事はしてないけど。

それより気になる事が一つ。

両親が助けた人なのだが、なんと俺が入学した梅ノ森学園の生徒だという。

学園に行ったらその人を探さなくては。

怒る為ではなく、両親の最後を聞くために。

さらに話が変わるが

プリンセスでラバーな展開が本当に起こった。

・・・俺の頭が狂ってる訳じゃない。本当にあったんだ。そんなトンデモ話が。

まず、俺の両親が亡くなってから起こった事を話そう。

俺の身元を引き受けると言う人が現れた。

もうお分かりだと思うが、会った事のない父方の祖父、有馬 一心だ。

梅ノ森財閥を数年前追い抜いた有馬財閥のトップらしい。

なんでも父は財閥を継ぐのと母との結婚の二択を迫られて、迷わず母を選んだらしい。スゲーな、父。

そして父が死んだ今、俺に白羽の矢が当たったらしい。

とりあえず、高校卒業まで待つてもらう事にした。即決とか無理。重すぎ。

その間、身辺警護と身の回りの世話という事で、一人メイドが付く事になった。

これまたもうお分かりだろう。

名を藤倉^{ふじくら} 優さん^{ゆう}と言う。

・・・マジで優さんが出てくるとは思わなかった。

しかも梅ノ森学園に転校することになった。ここまで忠実だともうツッコむ気力も出ない。

ちなみに資金援助もしてもらえる事になった。学費が無料^{タダ}とはいえ、さすがに俺一人じゃ二人分の食事代を稼ぐ事はできません。ハイ。そんなこんながあつて、高校を一ヶ月も休んでしまった。

そして今、俺と優さんは自分のクラスのドアの前にいる。同じ制服を着て。

そう“同じ”制服を着て。

「似合っていますよ。瑞希さん」

「俺、男よ？」

似合つてるとか言わんでくれ、優さん・・・。

優さんには公私共に名前+さんづけで呼んでもらっている。「瑞希様」とか有り得ない。

・・・最初はそう呼ぼうとしていたみたいだけど。

制服は、有馬御用達の仕立て屋が俺を女と勘違いしたらしく、男物は明後日にならないと届かないらしい。もう慣れたよ。

「二人とも、入って来てください」

お、呼ばれた。さて行きますか。

「はい」

こうして俺の高校生活は始まった。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない（後書き）

急展開すぎてゴメンナサイ。

次回はあっち側から始まります。

第2話 自分の姿を気にしてないからこうなる（前書き）

いきなり長いです。

感想指摘誤字脱字など書き込んでくれると嬉しいです。

4 / 2 編集しました。

鳴子の台詞が難しすぎる（汗）

第2話 自分の姿を気にしていないからこうなる

S a i d 三人称

梅ノ森学園、1 Dクラス内にて。

それは一人の女子が言った事から始まった。

「大変だ大変だー！」

そう大騒ぎしながらクラスに飛び込んできたのは、先月クラス委員長に立候補してそのまま当選した。(というか誰も他に立候補しなかった) 鳴子^{なるこ} 叶絵^{かなえ}であった。

「どうした鳴子、そんなに慌てて」

そんな鳴子に冷静な意見を述べたのは、浅黒い肌を持つ体術道場の跡取り息子。幸谷^{しちや} 大吾郎^{だいごろう}だ。

「何なんだろうと99,99%の確率で俺には関係無いね。三次元には興味無いし。」

どうせだったら『美少女がこのクラスに転校してくるんだ!』的な俺様好みのビッグニュースが欲しかったね」

いかにも「オッス、オラオタク!」とでも言いそうな感じのセリフを吐いたこの眼鏡は、女子から「鬼畜の菊池」という二つ名を授けられた。菊池^{きくち} 家康^{いえやす}。

クラス一の変態である。まったくもって死んでほしい。ハア・・・。

「ちょっとそれ酷くない?! 鳴子と大吾郎とかなり差があるよね!

？」

地の文を読まないでほしい。ああ、コイツの為に何行使ったか。勿体無い勿体無い。

「ホントに三人称！？泣いていいですか？！」

「ま、まあとにかく、何があったんだ鳴子？」

菊池が虚空にむかって何か叫んだあと、いきなり泣き出してクラス中ドン引きになってる中本題を切り出した少年は、この小説の元ネタになっている「迷い猫オーバーラン！」原作主人公。都築^{つづき}巧^{たくみ}である。

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれたね巧っち！実はこのクラスに転校生と復学生、計二人来るのさ！」

『！』

「しかも驚くなかれ、二人とも菊池のご希望通り美少女なのだー！」

『うおおおおお！』

「なんだと！それを先に言え！」

今の一連の動作を簡潔に述べると、

鳴子カミングアウト クラス全員驚愕 鳴子さらにカミングアウト

男共興奮&菊池復活

である。

しかし、一目見て「美少女」と言われる瑞希（男）が哀れである。

「ふーん。ま、美少女だろうが何だろうが、このあたしの美貌には敵わないけどね！」

と、「ヒャッハー！」と叫ぶ黒星さんもびっくりなこの天上天下唯

我独尊が似合うちつさな「ちつさい言うなー!」・・・可愛らしい容姿の子は、この梅ノ森学園の校長の孫にして梅ノ森財閥の後継者梅ノ森^{うめのもりちせ}千世その人。

「はん、そのちつこい体のどこにびばーがあるんだか。是非教えて貰いたいわ」

そんな事を言っているこのスタイル“は”完璧な少女は、都築の幼馴染にして喋る言葉の七割はツンデレ残りは暴言。口癖は「二回死ね」。芹沢^{せりざわ}文乃^{ふみの}ご本人。

そんなこんなでこの六人（まだまだいるけど）、今後大きく物語に係わってくる人達なのであった。

「あんたなんかに分かるわけないでしょ。あたしからにじみ出るこのオーラが!」

「元々無いから分かる訳ないじゃん。あつたとしてもにじみ出てるんじゃないくて、抜けていつてるんじゃない?」

「抜けていく分もないあんたに言われたくないわよ!」

「なんですって!?!」

「なによ!」

ちなみにこの二人、言わずともがな仲が悪いのである。

HR中、菊池と鳴子はと言うと。

「なあなあ鳴子。その二人はどれ位の美少女なんだ?」

興味津々の菊池。

ていうか興味津々じゃない方が菊池としてはおかしい。

「ん、シヨートの方の子は発育がまあまあ良かったかな。ランクAくらい。で、ロングの方の子はペッタンコだけどスタイルが良くてすごい美少女！ランクS！私も少し見とれたくらいだZE！」

あれですね。AからDまでランク（ryですね分かります。ちなみにペッタンコなのは男だから。

「なん、だと・・・」（背景に雷）

こんなの、HRの時にする会話ではない。

周りも同じような会話ばかりになってきた。

途中から来た先生、涙目。

「きよ、今日このクラスに転校生と家の用事で休んでいた子が来ます」

クラス中が静まった。

転校生イベントがある場合、普通逆の反応を取るであろう。なのにシーン。

先生恐怖で足ガクガク震えている。

「二人とも、入って来てください」

「はい」

Said 瑞希

ドアを開けてまず優さん、次に俺が入った。
優さんが入った瞬間「おおー」という声が上がった。まあ当然だろう。

だが俺が入った瞬間、クラスから歓声が消えた。ザ・ールド？時は止まんでくれ。

最前列でペンを回していた男子の手からペンが落ちた。

拍手をしていた手が止まった。

リボンを結びなおそうとしていた女子が固まって、リボンが落ちた。前を向いていた男子の眼鏡がずり落ちた。

「そ、それでは二人に自己紹介をし、してもらいますう」

そして先生、なんであなたは足ガクガクで涙流してんですか。
なにこれ、なんでこんなに力オスなの？

「ふふつ、みんな瑞希さんの綺麗さに固まっているんですよ」

優さん、なーにバカな事を。俺男ですよ？（女子の制服着てるけど）
見てろ、自己紹介で全てが分かる。

優さんは一歩前へ出て一礼。

「皆さんこんにちは。私、藤倉優と申します。

これから一年間よろしく願います。」

とても聞きやすい発音だった。流石メイドさん。

優さんの自己紹介をきっかけに固まっていた人が動き出した。

魔法使い？デ○ペル使えるの？

「どちらかというと、グラ○ジャの方が得意ですね」

あ、そうなんだ。てか知ってるのね○F……。

え？読心術には突っ込まないのかって？

A、慣れって凄いいよね。

そっぴいや俺の番だった。一歩前へ出て一礼。

「みやのじい宮小路瑞希です。

特技は声マネです。

こんな俺ですが、よろしく願ひします」

どーだ！一人称を「俺」で言ってやったわ！

これで誤解ナツシング！

名前の最後が“ほ”だったらエルダ 決定だけど。

偽名の理由はただ一つ。

“梅ノ森”学園に“有馬”はヤバいでしょ。

下手すると即退学だし。

そんな事を思っていると、なにやら向こうの方で「俺っ子美少女キター！」なんて声が聞こえた。

他からも「キレーな声……」「ハスキーボイスだ……」「お姉さま……」なんてのも。

……マジでエルダーの称号手に入れそうだ……。てか誤解解いたよね？みんなふざけて言ってるだけだよね？

「瑞希さん。このクラスとても面白いですね」

優さんが満足しているならそれでいいか。

別に考える事を放棄したわけじゃないぞ。うん。

俺と優さんは一番後ろの席に二人で座る事になった。
いちばんうしろの転生者。

・・・ゴメン。言ってみたくなかっただけ。

そのままHRは終了。直後にポニテの子と眼鏡の奴が来た。

「あつしの名は鳴子叶絵。生まれも育ちも鈴音町。このクラスの長をやっている者でさあ。何かあったら呼んでくんない！」

女子にしてはかなり珍しい自己紹介だな。あつしって何だよ。

「俺の名前は菊池家康。困った事があったら誰よりも先に俺を頼ってくれ」（キリッ）

菊池は俺に手を差し伸べてきた。

やっぱりか。

可哀そうに。

「まず誤解から解こう。俺は男だ」

クラス中カッチーン。こりゃ金の針使うしかないか？

まあ予想してたけどな。

予想したくもなかったけどな！

「え・・・ウソだろ？だつてお前、制服が・・・」

「仕立て屋が俺の性別を間違えた。そしてコイツを送ってきた。予備もなかったからコレ着てきた。OK？」

「ていうかもう女顔じゃん」

「それは生まれつき。何ならスカートの中見せてやろうか？俺の青いトランクスが視界に入るぞ？」

クラスのほとんどがビククリしている。え、何？誰も気付かなかつたの？
まさかね。

「一応質問。この中で俺が男だと気付いた人、いる？」

シーン。

「……………あーそうですかそうですか。
そういう事ですか。」

「ちよつくら川遊びしてくるわ……」

「「「「ちよつと待ったあ！」「」「」」」」

俺がベランダに飛び出ようとしたら優さんを含めた五人が俺を止めにかかった。

「ちょ、ちよつと待てって！」

「どこで川遊びするつもりなの！？」

「あつちはダメよ！逝っちゃダメ！」

「早まるんじゃない！」

「待ってください瑞希さん！」

うん、こちら辺でいいだろう。

「大丈夫大丈夫、俺別に逝ったりしないから。五人とも手え放してくれ」

ジョークジョーク。てか本気^{マジ}じゃなかったし？演技だし？
だから目からあふれてくる熱い何かも二セモンだし？
別にむなしかった訳じゃないんだからね！（ツンデレ風味）

あの後なんやかんやで誤解が解けてあの六人と仲良くなった。

なんやかんやはスルーでお願い。

男子からは名前で呼んでくれと言われ、俺は「瑞希」優さんは「藤倉」と皆から呼ばれることになった。

なんで俺は名字じゃないかって？偽名で呼ばれんの嫌だし。宮小路とか長いし。

放課後、巧の家兼ケーキ屋「ストレイキャッツ」に招待された。

中にいたのは巧の姉でオーナーの都築 乙女おとめさんと沢山の猫。店の名前に恥じないほど数はいた（推定十匹以上）。

乙女さんは体幹前方上部がボールみたいだった。

要するにデカインだ、アレが。

んでもって自己紹介終了後、いきなりハグをくれましたよ。

あっちとしては、これからよろしくの意味だったらしい。

だがその結果、頭の前半分がアレに埋もれた。アレは窒息モンだ。

感触く窒息の法則。

ちなみに肝心のケーキだったが、努力賞受賞作。

あれなら俺が作った方がウマイ。

自宅は学校から歩いて十分、ストレイキャッツから三分の所にある

二階建て一軒家。

そこで俺と優さん二人で住んでいる。

最初かなり抵抗があったが、流石にもう慣れた。

今なら優さんのマッパを見ても「風邪引くから服着な？」と平然としていられる。

それを優さんに言ったらorzってた。なんでさ？

それはともかく、今日一日でこの世界の事についてかなり分かった。

初めはプリンセスでラバーな世界に転生したと思っていたが、どうやらここは迷い猫オーバーラン！の世界らしい。

はつきり言って今更だな、という話である。だが、疑惑が確証になるにはこれだけの情報が必要だった。

それともう一つ、不思議に思っていることがある。

転生前の記憶保持である。しかも忘れる事も薄れる事も十六年間一度もなかった。

おかげで原作知識も忘れずにいられた。これに関してはよかったと感じている。

この世界の歯車は高校一年の夏一歩手前位から廻り出す。

それまでに俺は覚悟を決めておかなくてはならない。

“原作介入”という覚悟を。

第2話 自分の姿を気にしてないからこうなる（後書き）

次回原作一巻まで飛びます。

優さんと鳴子のキャラがいまいち分かりません。

ちなみに作者は家康が嫌いな訳ではありません。むしろ好きです。

（笑）

駄文でホントすいません。

第3話 未だにヒロインが登場しないのもどうかと思う（前書き）

かなり遅くなりました。

あと、感想がユーザー限定になっていたので解除しました。

どんなことでもいいので感想をお願いします！

第3話 未だにヒロインが登場しないのもどうかと思う

学園に来てから約二ヶ月が経った。

オチとしてこの二ヶ月の間に色々あったと伝えておこう。

まずクラスに慣れた。いや、正確にはクラスが俺に慣れた。

やはり不自然な時期の編入生だから、最初の頃は六人以外誰も話しかけてこなかった（本当は瑞希が女顔で、しかも美人だからどう対応していいかわからなかったからだが、その事を本人は知らない）。

逆に優さんはその性格の良さでどんどん交友関係を広げていた。その事実を知った日の夜、俺は枕を濡らした。

巧、家康、大吾郎の三人とは特に仲良くなった。今では「クラスの男四人組」のポジションになっているくらいに。

・・・今男四人組の「男」の部分に疑問を持った奴、少し頭、冷やそうか。

勿論ストレイキャッツにも足を運んでいる。ていうか、運びすぎてついこの間苦労が増えたばかりだけど、その話はまた後で。

入学して一週間くらいから妙に視線を感じるようになり相談してみたところ、家康から俺にファンクラブができたらしいと聞かされ、視線の正体はそれだという。

名を「宮小路瑞希様護衛隊 みんなてみぎきちゃん M M M」。それなんてS H U F L E ?

あと俺が優さんと同棲している事はまだ誰にもバレていない。バレると実家の事も同時にバレそうだし、何より腐っている奴らが五月蠅くなるから。

え？男子とかじゃないのかって？そんな君に教えてあげるよ。

「お前じゃあ女子と絡んでもバックが百合の花だからなあ」b y 菊池家康

その後、家康はMMMと楽しくフルボッコにしました。

それから有馬財閥後継者披露宴なるものに参加させられた。

そのままの姿で出ようとしたが梅ノ森（娘）が何故か来ていたので、眼鏡をかけて髪を肩の所で一つに結び、声を水橋かりに変えてステージに上がった。まんまStSのユー。祖父からは「何故そのような格好をしておる」と少し睨まれたが、事情を説明したら「そうだったか。すまん」と謝られてしまった。若本ボイスで謝られると、かなり迫力があつた。

その時に竹馬園^{ちくまゐん} 夏帆^{かほ}なる人物と出会ってしまった。この人、あんまし好きじゃない。特に六巻で幻滅した。

しかもなんか「仲良くしてくださいまし」オーラがビンビン伝わってくるからスゲーウザイ。

あの時祖父が呼んでくれなければキレていたかもしれない可能性有り。

帰りの車（まつ黒のリムジンだった）の中で、「瑞希さんは竹馬園様の事がお嫌いなのですか？」と優さんが聞いてきたので「Exacutely!」と、とてもイイ笑顔で即答した。

これほどまでに濃い二ヶ月間を過ごし、俺は七月九日を迎えるのであつた。

朝。

目を開けると白い壁が視界いっぱいに広がった。

「知ら・・・なかったらホラーだな。ここ自宅だし」

寝起きのテンプレなセリフは言わないぜ！

「瑞希さん。朝ですよー……って起きているんですね」

「あー優さん。おはよ」

「おはようございます。もう朝食の準備はできていますよ」

ちなみにいつもは優さんに起こしてもらっている。今日はたまたま優さんがこの家に来た時に「瑞希さん専属メイドとして、この家の家事は全部私が行います！」と堂々の宣言をしてくれた。

別にかまわなかったが、軽いノリで「ヤンデレだけにはならないでね？」と言ったら「十九話、怖かったですねー」と返してくれた。どうして優さんはこういうネタを知っているのかが不思議でならない。今度聞いてみよう。

とりあえず今は朝食の事を考えよ「あー瑞希さん」

「どうしたの優さん？」

「自分で言うのもなんですが、ツッコまないんですか？」

何によ？優さんのオタク疑惑に？

それは今じゃなくてもいいだろうに。

「その……私の格好に……」

「別に。だって優さんエプロン付けているだけじゃん」

「ええ！？そ、それだけなんですか！？」

「まあ、エプロン“だけ”つけているけどさ。それが？」

そう、今優さんは普通二次元でしか見られないような格好をしているのだ。

その名も、「裸エプロン」

「それが？って……はあ……」

「？」

他の奴は知らんが俺別に興味無いし。どちらかっていうと
興奮<<<<<<疑問 風邪引かないか心配
だし。

「もういいですよ。早く下に降りて来てください・・・」

何をそんなに気にしているんだか。
ま、いつか。

朝食を食べ終え、身支度を整えて家を出ようとした優さんに俺は

「アンタなんか、死んじゃえばいいんだ！」

と罵声を浴びせた。さあどう出るかな？

そしたら急に優さんが左胸を苦しそうに抱きながら玄関で倒れた。
と思ったらすぐに立ち上がり、何事もなかったかのように

「学校に行きましょう瑞希さん。いつもより少し遅れています」

と告げて家を出た。

本当に知ってたんだ十九話・・・しかも動作も完璧に・・・。
本当に優さんは何者だ？謎は深まるばかりだ。

遅れを取り戻すために小走りで学園に向かい、そのまま昇降口に到着。
そのままでのノリで教室に向かおうとすると、階段の踊り場で芹
沢を発見した。

「おはよ。何してんの？」

「芹沢さんおはようございます」

「おはよう瑞希、藤倉。別に何もしてないけど」

嘘つけ。語尾が若干イラついてたぞ。

何をそんなに・・・って、ああ成程。

一応優さんにも確認とるか。

「（優さん、芹沢のイラつきって）」

「（ええ、アレでしょうね）」

優さんも同じ結果にたどり着いたか。

まーコイツのストレスの原因なんて八割方アレだしね。（残り二割は家康）

「あー、先に行くが言っておくぞ芹沢」

「何？あたしに構わず教室いっても気にしないけど」

「巧、上履きなかったからこつちと別ルートで教室に行ったと思うぞ？」

「っ!？」

「あんま見栄張ってここに残っていたらHR遅れるからなー」

最後はもう動きながら言った。

ふう、これだけ言えば大丈夫だろう。

思ったとおり、芹沢は俺達を追い越すように早歩きでこつちに向かってきた。

教室に到着。同時に芹沢も到着。そして思いつき扉を開けた。

・・・うわー。この光景に慣れた自分が嫌になってくる。

巧が梅ノ森に撫でられていた。しかも身長差があるために巧が屈ん

でいる。

やっぱり知識として知っていても、生で見るとキツイな。

「男としての誇りは無いのか、都築」

大吾郎にまで言われている。

ということは前に家康からも何か言われているだろうな。

おっと、ここでの芹沢の反応は・・・。

せりざわのれいとうビーム！（目から）

こうかはばつぐんだ！（巧限定）

「巧・・・変態だって噂は本当だったのね・・・幼馴染みを返上したいわ」

幼馴染みを返上したい奴初めて見た。

「まーた弱味握られちゃって。あれですか、巧くんはこれとフラグ立てようとしていますか？やめとけやめとけ、そんなアブノーマルな関係。あと三次元は二次元と違ってイイ匂いとかしないんだぜ？くんくん・・・ほほう・・・濡れた子犬の香り。つまり獣臭い。うおっ！」

「ちっ、外したか」

家康に梅ノ森のアップーがヒットしそうだったので、家康の首根っこを掴んで引いてやった。

「・・・何してんの、お前」

一応聞いてみた。

「おお、瑞希！今オレは巧に二次元と三次元の違いを叩きこんでいるところだっ！」

「どちらかと言うと、お前が梅ノ森の頭の匂いを嗅いでいるところに見えたが？」

やっぱ助けなきゃよかったかなあ。

「……………頼る相手くらい選べばいいのに」

ぽそつと芹沢が一言。

あーあれか。「梅ノ森なんかより私に頼りなさいよ！」的な感じか。でもそう言つとさー。

「へえ？あたしじゃ力不足だつて言いたいのか？」

ほら。

優さんもこの後を予想して避難している。正しい判断だ。

「あら。そんなこと言ってないわよ。それとも心当たりでもあるの？」

「なんでそうなるのよっ！」

あーあ、始まつちやった。

収まるまで時間がかかるんだよなコレが。

ここで俺の選択肢は三つ。

- 1、割り込む（死亡覚悟で）。
- 2、傍観する（とぼつちりを受けるかも）。
- 3、逃亡（巧達を放置して）。

・・・・・・一つで十分だったな。
よし、逃げるか。

「おはよー鳴子」

先月あった席替えで隣になった鳴子に声を掛け着席。
ちなみに場所は二の川（これ分かる？）の前から三番目（縦に四列、横に五列ある）の右側が俺の席。

「オツス瑞希っち！なんだか朝から疲れているねい」

「アレのせいだ。アレの」

龍虎激突の方に指を向ける。

「何度見てもあの二人、仲いいね。妬けるZE！」

「眼科行け。そして眼鏡orコンタクトの選択をしてこい」

お前はあれをどう見ているんだ。明らかに「喧嘩するほど仲がいい」の範疇を超えているだろ。

しばらく鳴子と駄弁っているとチャイムが鳴った。
あいつらにとっては試合終了のゴングだろうな。

「とりあえず第一ラウンドは終了しました。今後どうなりますかね、
、実況の宮小路さん」

「一時間目に第二ラウンドを始めないでほしい」

それだけは勘弁してほしい。

「ところで大吾郎よ、なぜにお前は突っ立っている？」

「瑞希・・・喧嘩を止めるというのはとても難しい事なのだな・・・」

「は？」

放課後。

なにやら巧の席に家康と大吾郎が集まっていたので、俺と優さんも参加させてもらう事にする。

「おい巧、またなんかあったか？」

ちなみに「また」なのは、巧の姉の乙女さんが毎度毎度リトもびつくりのトラブルを持つてくる（起こすとも言う）からだ。
しかも持つてくる（起こす）度にストレイキャッツからいなくなるのである。

オーナーの自覚、あんのかなあ？

「瑞希か・・・姉さんが、また生き物を拾ってきたんだ」

「んん？そのどこがトラブル？いつものことじゃないの？」

「これまでも、よく耳にした話ですね」

「前の事件よか穏便な話じゃん」

一つの家族をヤクザから逃がすよりかはな。

「そうだけど、今回に限ってはそうじゃない」

「じゃああれか、拾ってきたのは猫耳生やしたグラマスな宇宙人か？」

もし本当だったら即刻沖縄に帰してあげなさい。

「いや違う。今回乙女姉さんが拾ってきたのは、ヒト（勿論地球人）
。それも女の子なんだよ」

巧は俺達にこれまでの経緯を教えてくれた。

夕方、家に乙女さんがいきなり帰ってきた。
その時に女の子といっしょだった。

女の子の名前は霧谷希。

乙女さんがこの町のどこかで拾ったらしい。

無口でほとんど無表情。

だけど、髪を留めているリボンをいじる時は少し笑顔になる。

なんでもこの町に探している人がいるという。

コミュニケーションが難しく、それ以外の情報は不明。

らしい。

たしか原作では村雨学園から逃げている途中で乙女さんに拾われた
はず。

でも“探している人”なんていなかったはずだ。

何かが引っ掛かる。

かなり重大な、そしてとても大切な何かが……。

第3話 未だにヒロインが登場しないのもどうかと思う（後書き）

次回でやっとヒロイン登場です。

優さんのキャラ崩壊がひどい。

そして梅ノ森が空気・・・。

文才の無さを痛感します。

今回は梅ノ森の暗躍（笑）です。

第3 / 5話 主人公に抜かりはない（前書き）

「一週間ごとに投稿！」

そんな事を言っていた時期が僕にもありました。
今回は最近影が薄い彼女のお話。

第3 / 5話 主人公に抜かりはない

S a i d 三人称

学園の中で、最も新大陸に近い場所　それは告白や授業サボリ、ゾンビになった幼馴染みの恋人の頭をぶっ叩く所。屋上である。

眼下に広がる街並みを見下ろしながら、梅ノ森千世はフンと鼻を鳴らした。

その視線の先には、六人の男女がいた。

都築巧、菊池家康、幸谷大吾郎、そして少し離れて芹沢文乃と藤倉優と宮小路瑞希が歩いている。

あの六人は、何かを隠している。

それが千世には、なんとなく気に入らない（実際の所、梅ノ森が巧達から話を聞かなかっただけで、自業自得な話なのだが）。

「……で？都築たちは何の話をしていたの？」

まるで独り言を呟いているかのように、千世が言った。

これで後ろに二人のメイドが居なければ、完全にイタイ子扱いだ。

彼女達は、学園都市が誇るレベル5の電撃使いとレベル4の空間移動能力者……

ではなく。

梅ノ森家に仕える使用人の子女達であり、千世の私的なメイドである。

「断片的にしか聞き取れませんでした……また、あの都築乙女が面倒なトラブルを持ちこんだようです。何かを拾ったとか、そのような会話をしておりました」

「なんか、前にも似たような話を聞いたような気がするけど。猫か犬を拾ってきたって」

「今回は事情が違うと、そのようなことも言っていました」

「ふうん………」

それにしても、だ。

本当に毎度毎度、飽きもせず面倒事を持ちこんでくる女だ………
……と千世は思う。

たかが姉の分際で、この梅ノ森千世の下僕たる巧をコキ使うとは。
（たかが同級生の分際で、人の弟を勝手に下僕扱いとは（笑））
その一事だけでも、実に許し難い。それに、どうにもあの都築乙女という女は苦手だ。

千世は過去数度、乙女と会って話したことがあった。

どれだけこつちが威圧的に攻め込んでも、ヘラヘラ笑って柳のように受け流される。

『かわいいー』とか、『抱っこさせてー』とかぐりぐりなで回され………」

あぐく豊満な胸で窒息させられかけた。

暖簾に腕押し、糠に釘、巧にアプローチ。

気がつくと、いつしかあちらのペースに巻き込まれてしまう。

おもしろくない。実におもしろくない。

都築巧は梅ノ森千世の下僕であって、芹沢文乃のペットでも、都築乙女の子分でもない（前提が間違っている）。

そうでなければならぬ。あたしだけの。

「ごころー。引き続き、あの六人のあとをつけて詳しく調べておくよーに」

両手でフェンスの網を掴みながら、千世は指示を下した。

豆粒のように小さくなってゆく巧たち一行の姿を、じーっと追い続

ける。

「都築は、あたしの下僕なんだから」

文句あるか、と言わんばかりに、千世はそう呟くのだった。

S a i d ? ? ?

「文句ありまくりだっつーの」

俺は梅ノ森に仕掛けた盗聴器から一部始終を聞いていた。
なるほど、あのメイド二人がスト キングしているのか。

「二人に話を聞かせないようにジャミングしておいて」

「はい。分かりました」

俺と同じように盗聴器から話を聞いていた従者に妨害電波の発信を許可した。

これで一安心。

「でも、いいのですか?」

「ん、何で?」

「いえ、梅ノ森さんはただ寂しがつているだけなのではと……」

ああ、成程。

やっぱり優しいな。

「寂しがつているからこそだよ」

「？」

「寂しいくせに、素直になれないあのお嬢様に思い知らせてやるのさ」

そう、分かせてやるのさ。

「自分から動かなきゃ始まらない” ってね」

第3 / 5話 主人公に抜かりはない（後書き）

投稿は2 / 3週間でしたいです。

1 / 1 / 1 優さんの口調を変更。

ウチの優さんは原作よりもフレンドリーですから。（笑）
感想待ってます！

第4話 キーワードに「シリアス有り」って書いたはずなのに・・・（前書き）

今回は三話の残りから書いたので一週間で投稿できました。
次回からはいつも通り2〜3週間かかります。

10/21修正。瑞希の口調が荒っぽかったので。

第4話 キーワードに「シリアス有り」って書いたはずなのに・・・

「ぶっちゃけた話、警察に届け出た方がいいんじゃないの？」

下校途中、家康からもっともな意見が出た。

「警察・・・？」

「いや、だってそうじゃん？その乙女師匠が拾ってきた女の子ってのは、オレらと近い歳っぽいんだろ？」

家康が乙女さんを師匠と呼ぶ理由は一巻53P参照。

・・・スイマセン。説明します。

とは言ってもカツアゲされそうになっている家康を、乙女さんが救ったってだけの話だけど。

家康曰く「唯一認める三次元女性」らしい。

「ってことは、家出少女ってセンも考えられるわけだ？家族が心配してるんじゃないのか？ま、乙女師匠なら、その辺のことを考えないはずないと思うんだが・・・」

家族つうか、村雨学園長が心配していると思うけどな。

だが、ここで警察に届けさせるわけにはいかない。

霧谷希の為に！そして大人の事情の為に！

「色々考えるよりも先に、乙女様やその方から話を聞かなければいけないですね」

「まあ、その通りなんだけどね」

優さんナイス！これで警察フラグは立たないぜ！

でもさ、そしたら今までの会話は何だったんだろうね……。
行数稼ぎだと思われんじゃない。

「ここで俺はお別れだな」

「私もここまでですね」

「え？瑞希と藤倉はストレイキャッツに行かないの？」

「まあ、色々あってな」

俺の原作知識が正しければ、この後に霧谷希のマップを見るハメになる。

芹沢の蹴りを俺は食らいたくない。

「それじゃあな」

「皆さん、お気をつけて」

「ああ、またな」

「瑞希達も気をつけろ」

「二人きりだからって、にやんにやんすんなよぐはあ！」

「……………じゃあね」

家康よ、お前の死は無駄にはしない。

夜。

風呂からあがってラノベを読んでいると電話がかかってきた。

「はい。あり、宮小路です」

危ねー。名前間違えるところだった。

『瑞希？都築だけど』

「巧か。どうした。例の子関係か？」

『いや、明日さ、創立記念日だろ』

「ああ、あの理事長が気まぐれと思いつきで学校作ったアホの日だろ？しかも日にちが七月十日だから納豆の日っていう」

うちの理事長は金銭感覚と頭が狂ってるんだと思う。

『そうそう。それでさ、朝からケーキ作るんだけど、来れるか？』

「何時から？」

『五時半からなんだけど・・・』

「大丈夫。じゃあ明日五時半にストレイキャッツの前に来るから」

『頼む、ありがとう』

そう、これが“この間増えた苦勞”である。

前に一人でストレイキャッツに来た時に「今日はもうお客さんも来ないし、皆でケーキを作ろう」「などと乙女さんが言い出したのがきっかけ。

その場にいた巧、芹沢、家康ら全員が、なんかもう諦めムードを漂わせていたので、特に反論せずに俺もケーキ作りをする事にした。だが、ここで事件が発生。

俺は作り方を知っていたので、勝手にケーキを作ろうとしていたら「あれ？瑞希君、ケーキ作れるの？」と聞いてきたので肯定すると「じゃあ腕前見せてもらおうかな」「なんて事を言ってきた。

そのせいで他の奴も乗り気になり、ケーキ作り大会がケーキ作り勝負になってしまった。

しかも、俺が作ったケーキを食べた乙女さんが、ストレイキャッツにスカウトしてきた。勿論俺は断ったのだが、乙女さんが「お願い！君だけが頼りなの！」と、涙目で俺の手を握ってくるので、逃げるに逃げられなくなってしまったのだ。

さらに、俺のケーキを食べた他の奴らも

「頼む！うちにはケーキを（一応）まともに作れる人が乙女姉さんしかないんだ！」

「うまいなコレ！なあ瑞希、今度俺になんか作ってくれよ。そして藤倉に頼んであーんてしてもらおうはっ！」

「おいしいじゃない。これくらいの作れるんだったら、手伝ってあげればいいじゃん」

などと言ってくる。（一人処刑執行）てか、なんかケーキ屋としてはあり得ない事を聞いた気がする。

まあ結局、週に三日の約束でOKしちゃったんだけど。

その後、町中に「ストレイキャッツに偶に現れる美人パティシエ」と「ストレイキャッツのケーキが美味くなった」という噂が流れた。後者は嬉しいけど前者はお断りだ。

そんな事があり、今やストレイキャッツの三分の二のケーキを俺が作っているので、偶にシフト以外の日も手伝うのだ。

七月十日、朝。

優さんに無理を言っただけで四時に起こしてもらい、家を早めに出て散歩をしていたところ、不思議な光景を目の当たりにしていた。

「うー……たのむからいえにかえしてくれ……」

「だらしがないぞ、菊池よ」

和服の肌が浅黒い少年と、それに引きずられている眼鏡の少年。
うん、あいつらだ。

「おーい、大ご「おお！あなたの今の動き、型、もしかや太極拳ですか？」おい」

「ああ、そうさあ。なんならお兄さんもやっついていくかい？」
「いいのですか！？では是非！」

お前ら、まず人の話を聞け。

お婆さん、あなたは誰ですか？

そして大吾郎よ、家康を置いて行くな。

「うーん、たくみのいえはどこだー・・・あつ」

こんなにフラフラじゃねえかよ。しかもコケてるし。
仕方ない、コイツも連れて行くか。

「大丈夫か？」

「んー・・・だい丈夫です“お姉さん”」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」(怒)

そんなに死にたいのか

とは言ってもコイツもある意味被害者か。

うーん、どう始末してやろうか。

・・・・・・・・・・・・・・・・よし、これにしよう。

ポケットからゴムを取り出し、髪をポニテに。

そして声を変え準備完了！

「そう？大丈夫ならいいのだけれど。それより、どうしてこんな時間？」(CV田中 恵)

精神的に参らせる事にした。

「友達に別の友達の家の手伝いをして行こうと朝四時に無理矢理誘われて連行されている途中にその友達が公園で太極拳をやっている婆さんに話しかけてそのままいっしょに太極拳をやる事になって俺を放置したんですよ姉さああああん！」

事情を説明し終えたら、いきなり俺（女装中）に抱きついてきた。スゲー嫌なんだけど。

「ただ今、俺はお姉さん。（のフリ）だから俺は家康を抱きしめ返してやった。」

「とても大変だったのね。よく頑張ったわ。代わりにお姉さんが一緒に付き添ってあげる」(CV田中 恵)

「え、でもいいんですか？」

「いいの。私も今暇だから。それに……」
（CV田中恵）

ここで少し恥じらうフリをして。

「……君にも少し興味があるしね」（CV田中 恵）

「え!？」

「ふふっ、さあ行きましょう。どこなの？そのお友達の家は」
（Ｃ）
Ｖ田中（恵）

「はい！えと、こちらです」

あは、あはは、あはははははははははは！
マジ、たのしー！

只今五時

俺（女装中）と家康は巧の家に到着した。

移動中に家康の事を聞いたり、どんな子が好きなのかを聞いたり、結構おちよくってやった。

しかも話の途中途中でオタク嫌いを匂わせる発言をしたので、家康のオタク発言抜きのがチトークが聞けた。

いやー結構騙せるもんだな。これならエルダ も可能だな。

アレ？でも騙せる〓分からないって事は、

分からない〓それほど女っぽいつて事じゃ・・・。

うん、あまり深く気にしないことにしよう！（現実逃避）

「言つとくけど、オレはヤダって言ったんだぞ。なぜ朝っぱらから電話せにやなんのだと」

そして家康は巧に電話中。

『家康か？家康・・・だよな？お前、いま何時だと思って』

「五時だ！しかしオレが叩き起こされたのは、四時だッ！誰に叩き起こされたって！？決まってる。朝の稽古をしていたら、ふと都築たちのことが気になったのだ。これから一緒にやつの手伝いに行こうと思うのだが同行してくれないか、なあに都築なら早朝から洋菓子の仕込みで起きているから心配はない、任せておけ。とか言いだして、オレが起きてるかどーかは考慮の対象外だったアホですよ！ヒントは、ふんどし！」

『・・・大吾郎か』

「おお、そいつだ。そのバカだ。ちなみにそいつは今、公園で太極拳やってた婆さんと意気投合して一緒に遊んでるときだ」

『お、おい・・・別に無理しなくても』

「もう手遅れだ。だってオレ、その公園で出会ったチョー美人のお姉さんと一緒に店についちゃったもん。いまねー、店の前」

ストレイキャッツの二階の窓のカーテンが開かれた。
そこから巧がものすごい目を見開いてこっちを見ていた。

「やつほー」

家康が巧に手を振っていたので、俺（女装中）も笑顔で小さめに手を振った。

そしたら巧が少し顔を赤くしていた。

え………気付いてないの？

てか顔赤くすんな。

『………すぐ、そっちに行く』

「いや、別にいい。むしろゆっくり来て。俺はまだお姉さんと楽しくお喋りしたいから」

巧、なるだけ早く来て………。

十分くらい家康とお喋りしていると、むこうから芹沢らしき人物がやってきた。

「菊池、ぐ、偶然ね。こんな所で会うなんて。ところで、何してんの？」

「偶然かあ？まあいいけど。俺は中略で、巧を待っているところ。で、芹沢は？」

「あ、あたしは散歩してたら、たまたまここにきて、アンタと知らない女の人がここに立ってたから気になっただけよ」

嘘つけ。どう見ても狙ってここに来てんだろ。

あとお前も気付かないのか。

芹沢が来て十分くらい経つと、ストレイキャッツのドアが開いた。

「文乃………?」

「うつさい。黙れ。早く中に入れなさい」

うわー、巧に会ったとたんに不機嫌度アップだよ。本当は嬉しいくせに。

ツンデレって面倒だな。

「ていうか、なんでこんな朝っぱらに？」

「朝の散歩してたんだとさ。そしたら“たまたま”店の前を通りかった。そこにオレとお姉さんが立ってたから不審に思ったんだつてよ」

んな訳ないよなー普通。

もっとマシな言い訳しろよ。巧、顔が若干引きつってるぞ。

「なんなの、何を始めるつもりなのよ」

芹沢が、巧と家康と俺（女装中）を交互に見つめた。

別にケーキ作りに来ただけですけど何か？

「大吾郎は？」

「来ないね。もうアイツの存在は忘れてしまおうかと思う」

おいおい、忘れてやるなよ。

「代わりに、このお姉さんを招待しようと思う。巧、別にいいだろ

う！」

「ま、待てつて。とりあえず、この人は誰なんだ？」

「そうよ。さつきから凄く気になってたんだけど」

お前たちのクラスメイトだよバーカ！（泣）
いい加減誰か気付けよ！

「この人は、公園で大吾郎に捨てられたオレに手を差し伸べてくれた優しい人なんだぞ！」

「そ、そうなんですか？」

「ええ、概ね間違つて無いわ」（CV田中 恵）

性別以外はな。

「珍しい。あの三次元嫌いの家康が・・・」

「この人に勝てる美人なんて乙女さんくらいじゃない？」

「いや、乙女姉さんでも厳しいぞ」

好き勝手言いやがつてこの野郎共。
今から現実つて奴を教えてやる。

「そういえば自己紹介をしていませんでしたね。私、宮小路瑞希と言います」（CV田中 恵）

「「「ゑ！？」」」

「だあーかあーらあー」（CV田中 恵）

いくぞ家康、体力の貯蔵は十分か？

「寝ばけてたからって女装もしてないのに性別間違えてんじゃねー！」

「ぐっはあああ！」

一蹴！

家康処刑後、大吾郎も来たので事情を説明。

「で、何？結局全部アンタの勘違いってこと？」

「ふあい、ほうでふ（はい、そうです）」

「お前らも気付かなかったけどな」

「だ、だって普通気付かないでしょ！髪型と声変えられちゃ」

「ポニテも体育の時見せた事あるし、何より顔は同じだ」

「うっ」

もういいよ。

俺が本気で女装したら、中学の時みたいな事になるし。

「それで、例の娘はどうした？」

「例の娘って、希のことか？リビングで猫の相手をしてくれてる。言っておこう、ヤツはかなりの手練れだ」

「なん・・・だと・・・！？」

家康復活。

「ていうか、もうじゅうぶん様子を見たので家に帰っていいですか」

と思ったらコイツ帰ろうとしてる。

絶対に帰らせん。

「そついや俺と家康がここに来るまでの会話、録音してたんだよねー。今ここで人数が減ったらこのボイスレコーダー流しちゃうかもしれないな」

「瑞希様、誠心誠意お手伝いさせていただきます」

帰宅阻止。

へっ、良いサーヴァントゲットだぜ・・・。

しかも令呪いらず。

「瑞希、お前以外と黒いな・・・」

なにをおっしゃるたくみさん。

ソナナコトナイヨ？ホントダヨ？

「まあいいけど。さて、始めるか」

「言っとくけど、手伝わないからね」

じゃあ帰れよお前。

「そうか、じゃあ卵を持ってきてくれ。冷蔵庫にまだ一箱あるはずだから」

「手伝わないって言ってるのに」

とか言いながら冷蔵庫に向かうのは、どこのツンデレさんかな？かな？

あと巧、合掌なんかするなよ。仏壇でもあるまいし。

「なんか、ケーキ作るのを手伝いにくるのは、ずいぶん久しぶりのような気がする」

「前は好き勝手にケーキ作っただけだもんな」

「そうだな、前回に来たのは正月だっけ？」
「いんや、もつと前。たしか去年のクリスマスだ」

去年のクリスマス。

確か学校でクリスマス会をした。

女子の高梨がミニスカサントの衣装を持って来ていて、それを俺は無理矢理着させられた。

さらに女子の森から化粧道具を借りて、本格的に俺を女装させた。仕方がないのでその格好で教室に入ると、男子のほぼ全員が前傾体勢になるという事件が発生。

ならなかった奴も、鼻を押さえて教室から出ていくという始末。その時、鼻を押さえている男子の指の間から赤い何かが見えた。初めてクラス男子に殺意を覚えた瞬間だった。

「ど、どうした瑞希？なんかスゴイ顔になってるぞ？」

「気にするな。さて、まずスポンジを焼くか」

先にスポンジケーキだけを焼いておく。

そうすれば、いつでも生クリームなどで仕上げられるからだ。

「いつも通りジェノワーズでいいんだよな？」

「ああ、頼む」

ジェノワーズ生地^{きじ}。

卵を卵黄と卵白に分けず、一緒に混ぜて作る生地^{きじ}の事である。

「大吾郎、混ぜるの手伝ってくれ」

「む、承知した。力の限り混ぜてみよう」

「普通にハンドミキサーで手伝えバカ」

お前は本当に現代人か？
週に七日は疑う。

「家康、お前はケーキ型にクッキングシートを敷いてk「おっと、オレに仕事を任せていいのか？知らんぞ？」」

「真面目にやらなかったら、ボイスレコーダーを昼休み中ずっと流す」

「瑞穂様のご命令、必ずや果たせて見せます！」

いやー、本当に令呪いらすのサーヴァントだなー。

「おっはよーお」

俺らが作り始めてから五分くらいして、誰よりも遅く、このケーキ屋の正式なパティシエが登場。

乙女さん、頼むから俺よりは早く起きてくれ。
アルバイト

もう無駄だと思いつつもそんな事を考えていると、乙女さんの背中から女の子が顔を覗かせていた。

その子の顔を見た瞬間、頭の中で全てのピースがはまった。

“知識”と言うパズルに“記憶”と言うピースが。

そうか。

そう言う事か。

確かに“知識では知っ^ていても”だな。

相手も気が付いたのだろう。

俺の傍に駆け寄ってきた。

「みずきっ！！」

嬉しいな。覚えてくれていたのか。

俺があげたそのリボン、着けた姿見たことがなかったけれど良かった。

た。

とても良く似合っている。

沢山話したい事があつたけど、今はこの言葉しか思いつかない。

「久しぶり、のぞみちゃんゴフツ！」

彼女　霧谷希Ⅱのぞみちゃんからのハグという名のタックルを受け、後頭部を壁にぶつけた。

空気、読めよ壁・・・・・・・・。

クロノレベルのKYな壁を恨みながら、俺の意識は飛んでいった。

第4話 キーワードに「シリアス有り」って書いたはずなのに・・・（後書き）

やっとのことでヒロイン登場！

のはずが・・・。

感想待ってます。

第4 / 5話 だから前回ポニーテールにした（前書き）

すいません。かなり遅れました。

正直この話は無くてもいいのですが、原作の希とこの小説の希の想いが違うので、そこを感じてほしくて書きました。

勿論、原作を読まなくても分かるように書いたつもりです。

第4 / 5話 だから前回ポニーテールにした

S a i d 三人称

A M 5 : 3 3。

霧谷希は起床した。

いや、したと言うよりさせられた。

一階の方で、同級生の男子を年上の女性と間違えた男子が強烈なミドルキックを食らったような音が聞こえたからだ。

希は起き上がろうとして、体が動かない事に気が付いた。

足先や指先は動くのだが、所々の関節が動かない。

しかも頭だけは左右を何か柔らかい物でガッチリ固定されている。

「ううゝん・・・・・・・・・・」

そんな時頭上から、眠たげな声が聞こえてきた。

「ふわあゝ・・・・・・・・んー？あ、のぞみちゃんだあゝ。おはよゝ」

「・・・・・・・・にゃあ。乙女、おはよう」

声の主は都築乙女であった。

乙女は希を抱き枕のようにして寝ていたので、希は動けないのだ。ちなみに頭を固定しているのは乙女の母性の塊である。

「・・・・・・・・乙女、動けない」

「んゝ、もうちょっとこのまま」

「・・・・・・・・わかった」

この家に来てまだ一週間も経っていない希だが、『乙女の行動にい

ちいちつまない』という暗黙のルールを既に肌で感じ取っていた。

あの後十分くらい乙女の抱き枕になっていた希は、顔を洗いに乙女と一階まで下りていた。

「希ちゃん、ここでの生活には慣れたかな？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

希は答えられなかった。

無論、施設での生活と比べれば、ここでの生活は天国と言っても過言ではなかった。

いつもニコニコしていて、傍にいただけで心が温かくなるような乙女。

いきなり家に来たのにも係わらず、自分を気遣ってくれる優しい巧。そんな二人と一緒に過ごしていたが、慣れたかと聞かれれば、簡単には首を縦に振れなかった。

それは、自分がこの二人に迷惑になっていないかという不安と、瑞希の事があるからだ。

有馬瑞希。

十年前、既にあの頃から周りに人がいなかった自分に話しかけてくれた、霧谷希唯一の“友達”。

自分みたいな子と遊んでくれて、別れ際には自分が使っていたリボンをくれた。

彼と遊んだ時間は、この十年間で一番の思い出だった。

だから、第四村雨学園 施設から抜け出す時に行く事にした目的地は、彼が住んでいると言っていた「すずのねちょう」という所にした。

だが、まだ彼とは会えていない。

もう彼はこの町からいなくなってしまったのだろうか。

「大丈夫。絶対見つかるよ」

気が付けば、髪留めの青いリボンに手を伸ばしていた。

それを見てか、乙女が声を掛けてくれた。

やっぱり乙女は優しい、と希は心が温かくなっていくのを感じた。

「大吾郎、混ぜるの手伝ってくれ」

「む、承知した。力の限り混ぜてみよう」

「普通にハンドミキサーで手伝えバカ」

そんな時、厨房の方から甘い匂いと共に声が聞こえてきた。

「お、ちゃんとやってるな」

「・・・？」

「今ね、巧達がケーキの仕込みをしてくれてるんだ」

「・・・乙女は、しないの？」

「・・・にやあ。忘れてた」

「さ、さあて、お姉ちゃんも行こうかなー」

「・・・にやあ」

『乙女の行動にいちいちkkrry

洗顔後、乙女は厨房に重役出勤した（忘れていたとも言っ）。

「おっはようお」

したにも関わらず、満面の笑みだ（ストレイキャッツの正式なパティシエは乙女だけである）。

これを見れば分かると思うが、乙女の神経はS・L・B並スター ライト プレイカーの太さなのだ。

希は乙女の後について行き、乙女の背中から顔だけを覗かせて奥を見た。

瞬間、視界に入った光景に目を見開いた。

いや、光景と言うより人物に驚いた。

綺麗な黒髪をポニーテルにまとめ上げた、女顔の男の子。

誰が見ても女と見間違えるような美人だが、希はそこで驚いたのではない。

あの時と同じ髪型。

自分が探していた、大切な友達。

考えるよりも先に体が動いていた。

走りながら、想いを言葉に変える。

「みずきっ!!」

彼は希を見ると、懐かしそうに目を細めた。

嬉しい。

相手も覚えてくれていた。

もう我慢できない。

そのままの勢いで希は瑞希に抱きついた。

「久しぶり、のぞみちゃんゴフッ!」

彼　有馬瑞希との十年ぶりの会話は、お互いの名前を呼び合・・・

ンゴフツ？

希が顔を上げると、瑞希が後頭部を壁にぶつけ、白目をむいて気絶していた。

「・・・・・・・・ごめん／＼／」

二人の幼馴染の再開は、女の子のタックルと男の子の気絶という本人たちも吃驚なものだった・・・。

第4 / 5話 だから前回ポニーテールにした（後書き）

なかなか一巻の内容が終わらない（笑）

次回は三週間以内に投稿できるように頑張ります。

感想待ってます。

第5話 「若干」なんて甘いものじゃない（前書き）

ここでもさかのオリ展開。

書いた作者本人もびっくりです。

第5話 「若干」なんて甘いものじゃない

朝？

腹に重みがあり、目を開けると、プリントにジーパンを穿いた女が馬乗りしていた。

「おはようお兄ちゃんっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・舞華？」

篝^{かがり} 舞華^{まいか}。

少し長めのサイドテールに茶の混じった黒い髪。そして一つ下の十六とは思えない程のスタイル。

俺（転生前）の妹であり、転生した日、高校の補習に行く時に姿を見たのが最後だった“はず”。

どうしてここにいるんだ？

第一、ここはどこだ？

「舞華、突然で悪いけど、少し一人にしてくれないか？」

「うん。別にいいけど・・・・・・・・大丈夫？どこか具合でも悪いの？」

「何でもないよ。ちよっと考え事」

「そう？ならいいんだけど・・・・・・・・」

舞華は部屋を出る前にもう一度俺振り返り「下で待ってるから、何かあったらすぐに呼んでね？」と言った。

久しぶりだからか、妹の優しい言葉が心に沁みわたる。

とりあえず一度情報を整理しよう。

俺はのぞ「すぐに呼んでね？」

「わかった。すぐに呼ぶから」

「本当だよ？」

「ああ。ありがとうな、舞華」

「うん／＼／」

俺は舞華の頭を撫でた。

優しいって言うか、若干ブラコンなんだよなあ。

大きく深呼吸。

すう、はぁー、すう、はぁー。すう、波あ！

よし、情報整理開始だ。

俺は十六年前に車に撥ねられて？死んだ。

と思ったら迷い猫オーバーランの世界に転生していた。しかも記憶付きで。

高校入学直前に親が「本当の本当にすぐだからね！？」

「わかったよ………」

桐 とウチの妹を足して二で割ったらイイ感じの妹ができる気がする。

まあ、それはともかく。

やっぱり情報整理しなくていいや。薄々どいう事になったか分かってるし。

決して面倒になった訳ではないっ（キリッ）。

さて、この部屋を調べるか。

「って言ってもなあ・・・」

内装といい、妹といい、十六年前と何も変わっていない。明らかにここは俺が元いた世界だ。

近くにあった携帯電話を開いてみると、今日は七月二十四日。俺の記憶が正しければ、転生した日が二十三日。つまり次の日である。

立ち上がって、机にあった鏡を見た。

黒髪短髪に、いたって普通の顔立ち。
かがり ゆった
名を簪 雄太。

予測はしていたが、やっぱり有馬瑞希の顔ではなかった。全てが元に戻った？ 気絶しただけで？ 体に違和感が纏わりついているような感覚が、とても気持ち悪かった。

一通り部屋を調べたところで舞華が様子を見に来たので、そのまま部屋を出てリビングに来た。そして只今朝食中。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「このあと暇？」

「うん・・・」

暇と言えば暇なのだが、もっとこの世界を調べないといけない。

「要件にもよるけど、何かあるのか？」

「えっとね、その・・・私と、で、デートしてくれないかなー、な

んて・・・」

「デート？まあ別にいいけど」

転生前は何度もしてたし（妹限定）、町調べもできるから一石二鳥。

「ホント！？やったあ！じゃあ食べ終わったらね！」

「ほんあいはやくあお（そんなにはしゃぐなよ）」

「だって、お兄ちゃんとデートなんて久しぶりだったから／＼／」

普通は彼氏にするだろうよ、そんな態度。

というか今の言葉が何故わかった。

恐るべしブラコン。

三十分後。

二人で家を出て、舞華に行き先を聞いたら、

「ゲーセン！」

つて元気に応えてくれたよ。さすが我が妹。

そのまま近くのゲーセンに行こうとしたら、舞華が腕にしがみついた。
てきた。

「ダメ？」

「いや、構わないんだけど、何故に押しつける」

「んー、何となく？」

何を押しつけられたかはご想像にお任せしよう。

ヒント：大きくてすごい柔らかかった

夕方。

ゲーセンで舞華に格ゲー（F a t）でフルボッコにされた後、昼食をとってから別の所のゲーセンで格ゲー（ガンム）再戦。勿論フルボッコにした（妹が）。

結局俺が勝てたのは財布の軽さのみ。

父さん、母さん。俺、もう逝ってもいいかな・・・。

「勝手に逝っちゃ駄目だよお兄ちゃん。少なくともケーキ2ホール買ってくれるまで。」

「お前、ホント悪魔だよな」

「お兄ちゃん限定の悪魔だよ？」

そんな悪魔いらねー。てかハート消せハート。

格ゲー再戦時、勝つ気満々だった俺は「俺に勝てたら五万以内で何でも買ってやる」などと口走っていた。

それを聞いた舞華は呆れ半分、憐れみ半分に「ああ、うん。ありがとう・・・」と返事した。

今となってはどれだけ無謀な事だったかが良く分かる。

ティナとバルが白い魔王に突撃するくらいに。

「ねえお兄ちゃん」

「どうした舞華？」

ホール追加か？

それだけはやめてくれ。男が一人でケーキを何ホールも買う姿はこう、絵面的にキツイ。

「ずっと、一緒に居てくれるよね？」

それは不安そうな声だった。

デートと並行して町調べもしてみたが、特に変わった所も無く、懐かしい風景のままだった。

元に戻るかもしれない。

舞華や友人たちと毎日を楽しく暮らす、あの日々に。

「ああ。これからもずっと・・・」

その先を言葉にしようとして、止まった。

家へと続く大通りを抜けようとした時、見たことのある店が目にとまったからだ。

ストレイキャッツ。

それを目にした瞬間、頭の中にいろんな人の顔が現れては消えていった。

巧。

芹沢。

梅ノ森。

乙女さん。

大吾郎。

家・・・ナントカ（顔にモザイク）。

鳴子。

一心さん。

中学時代みんな。

父さん。

母さん。

のぞみちゃん。

そして優さん。

「舞華、ゴメン。一緒には居られない」

「え・・・？」

「帰らなきゃいけないんだ」

そう、みんながいるあの世界へ。

そのままストレイキャッツに歩いて行こうとしたら、思い切り手を舞華に掴まれた。

「行かないで!!」

「舞華……」

「もう、私の前から居なくならないで……!!」

“もう”？……まさか、舞華が

この世界に俺を呼んだのか？

口に出さなくても分かったのか、舞華が説明してくれた。

「うん。知らないおじさんに頼んでね。お兄ちゃんが並行世界で気を失ってる間に、私の意識を割り込ませてもらったんだ」
「なるほど……ってなあ!?」

何か今スゴイ事をさらっと言われた気がするんだけど！

知らないおじさん!?

意識の割り込み!?

「しかもね、私のパンツを見せただけでここまで手伝ってくれたんだよ」

「ちょ、ちょっと待って。一旦待って。ホント待って!」

落ち着け、Coolになるんだ俺。

「……じゃあ何か？俺に会う為だけに怪しさMAXなおじさんにパンツ見せてここまで来たと?」

「うん。だって、お兄ちゃんの事がすごい心配だったから・・・」

Q 兄と接触する為に自分の下着を赤の他人に晒す妹（16）って
どう思います皆さん。

A ド変態乙。

A ブラコンワロタww。

「それより舞華よ。そのおじさん何者？」

「んとね、おじさんは自分の事を『魔法使い』って言ってたよ」
「舞華、今後一切ソイツに近づくな」

「?うん。わかった」

それ、違う意味の魔法使いだから。

「さて、と。そろそろ行くか」

「も、もう行っちゃうの?」

「そんなに長居してたら、帰りたなくなるからな」

この世界はぬるま湯みたいなもの。

適温で気持ちいいけど、長く浸かっていると他の湯に入りたくなくな
ってしまふ。

「お兄ちゃん」

「どうした舞華」

「最後に・・・キス、して」

俺は舞華の前髪を押さえ、おでこにキスをした。
篝家伝統の“約束の証”。

「元気でな、舞華」

「うん、お兄ちゃんも・・・／＼」

俺はストレイキャッツのドアノブを掴み、ゆっくりと後ろに引いた。
そしてドアの中から光が溢れ出し、俺を包み込んだ。

S a i d 舞華

光が消えると、お兄ちゃんごとお店が消えていた。

「あゝあ。行っちゃった」

本当は傷つけてでもお兄ちゃんを返さないつもりだった。

だって、大切に、大好きで、狂っちゃうくらい愛してる人だから。
でも、久しぶりのキスを貰ったら、頭の中が真っ白になって、その
ままお兄ちゃんを返しちゃった。

だからって、諦めたわけじゃないけど。

「待っててね、お兄ちゃん・・・」

主人公が消えたせいで崩壊していく世界の中で、私は小さく呟いた。
お兄ちゃん

第5話 「若干」なんて甘いものじゃない（後書き）

舞華は初投稿時から出そうと考えていたオリキャラで、無事に出せて一安心です。

少し無理やりな気もするけど、ご都合主義って事で勘弁してください。

さて、次に舞華が出るのはいつになるやら。

実は作者も考えていなかったり（笑）。

感想待ってます。

第6話 キミノキモチノオレノオモイ（前書き）

一ヶ月以上遅れてしまつてすいません。

今回で一卷の内容が終わり、第一章が終了します。

なのでコメディ抜きのオールシリアスで進みます。

最初はコメディでいこうかと思い、途中まで書いていたのですが、最後くらいはきちんと絞めたいと思い、今回はシリアスで突き通します。

不快な方やいつものノリが好きな方は読まなくてもOKです。

あ、最後にアンケートがあるので、そこには参加していただきたいです。

第6話 キミノキモチ／オレノオモイ

最初に見えたのは、白い壁。

次を感じたのは、右手を包んでいる温かさ。

起き上がろうと体を動かしたら、右手を握っていた人が目を覚ました。

「んっ」

「優さん。おはよ」

「……………瑞希さん？」

まるであり得ないものを見たかのような声。

俺はそんな優さんの声を初めて聞いた。

「うつ…………うつ…」

「優さん？」

「うつ…………みずき、さんが、もう、目を、覚まさない、かと思つて、いた、から……………」

「そっか……………」

皮肉なモンだ。

こんな時にならないと、彼女の心が分からないのだから。

「俺、何日くらい気を失っていたの？」

「えっと…………二日半、くらい、です」

落ち着いた優さんから、俺が寝込んでいた間の事を聞いた。

予想通り、たった二日半で色々な事があつたらしい。

俺が倒れた次の日に希の学園編入が決まり、更に次の日には乙女さんと一緒に登校した。

梅ノ森が乙女さんに丸め込まれたのだろう。

その日にはプール開きがあり、一悶着あつたという。

ま、そりやあるよな。特に梅ノ森とか芹沢とか。

さらに同じ日の放課後に、梅ノ森がサークルを作るとか言い出したらしい。

俺的には賛成だ。このサークルが後々重要になってくるからな。

さらにさらに、乙女さんがまたいなくなった。

今回は北欧の戦争を止めに行ったとか。

．．．．あの人は何処へ行くのだろうか。

俺が学校を休んでいる間には見舞い客は来なかった。

財閥の事や同棲の事などがあるから、住所は誰にも教えていないからだ。

それはともかく。

「なんで部屋が真つ暗なの？」

「何時間か前に台風で停電が起きたんです」

成程。台風があつたのか。

ん？台風？

．．．．．あ。

「あのさ、今何時？」

「時間ですか？只今午前4時25分ですけど．．．」

どのくらい分からないけど、巧の起きる時間がだいたい5時半だから．．．。

少し危ないかも。

「優さん。今すぐ家を出たいんだけど、用意できる？」

「はい、大丈夫ですが・・・どうしてですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

説明するにも時間が足りない。原作には“いつ”家を出たなんて書かれていなかったからなあ。どうしたものか・・・。

「分かりました。聞きません」

「え？」

そんな時、優さんが思い切ったように言った。

「ただし、今は、ですけど」

「・・・どうして？自分で言うのも何だけど、起きてから三十分も経っていない病み上がりが、いきなり『家を出たい』なんて言い出したんだぞ？」

客観的に見て、俺の行動はおかしいだろう。

それでも優さんの表情には迷いが見えなかった。

「瑞希さんの表情からして、あまり時間がないという事が分かりました。それに・・・」

「それに？」

「瑞希さんの行動に無意味なものは無いと、少なくとも私は信じていますから」

そこまで俺の事を信じているのか・・・。

「ありがとう、優さん。」

なら、急いで準備してくれるかな？」

「はい。了解しました」

なら、全力を持ってその“信頼”に応えよう。

この時ばかりは、俺を転生させた“何か”に感謝した。

S a i d 希

4時50分。

私はお世話になった家を出た。
ストレイキャッツ

無論、誰にも声はかけていない。

夜中、台風の影響から来る雷の怖さから、巧の手を必死に掴んで寝ていた文乃を見た時に分かった。

『ああ、ここは私の居場所じゃないんだな』と。

あの優しい巧なら、私を気の済むまで家に居させてくれるだろう。けど、わたしは恐れていた。

自分という存在が、彼らの日常を壊してしまうのが。

有り体に言えば、人に迷惑をかけるが怖かったのだ。

いや、もっと簡単に“みんなに嫌われたくなかった”のかもしれない。

だから、ここを出た。

第一、目的はもう済んでいるのだ。

彼と出会うことができた。

たったそれだけのこと。

それでも、私にとっては大事なことだった。

もう後に残すことはない。

さて、どこへ行こうか。

「どこへ行くこうしてるんだ？」

そんな時、私の心を見透かしたかのような声が聞こえてきた。奇しくも、それは私が一番聞きたかった声だった。

Said 優

「どこに行くこうしてるんだ？」

瑞希さんが家を出てから、初めて発した言葉でした。

あの後、用意ができた瑞希さんは、一目散に家から出ました。

台風の影響で、アスファルトが濡れているにも関わらずに。

私も直ぐに追い付きましたが、瑞希さんはここに来るまでずっと無言でした。

そんな瑞希さんに話しかけられる訳もなく、私達の間には沈黙が続きました。

どこへ走っているのかと思っていたら、とある家の前で急に止まりました。

洋菓子店『ストレイキャッツ』。

そして店の前に、一人の女の子がどこかへ行くこうしていました。

彼女の名は霧谷希さん。

霧谷さんの話では、瑞希さんと幼馴染みだとか。

その彼女は今、なぜこんな朝方に家を出ているのでしょうか。

そして瑞希さんは、なぜここに来たのでしょうか。

まるで、霧谷さんを止めに来たかのように。

気になる事は沢山あります。

ですがそれも後回し。

『すべて』が終わるころに、瑞希さんが全部教えてくれると分かっていますから。

S a i d 瑞希

「……………にああ。瑞希」

「まともに話すのはこれが初めてだな、希」

希は俺が名前を言った時に少し反応したが、それだけだった。

「もう一度聞く。希、どこへ行こうとしてるんだ？」

「……………にああ。瑞希こそ、どうしてここに？」

「質問を質問で返すのはルール違反……………って、まあいいか。俺は優さんと朝の散歩」

「……………今まで寝込んでいたのに？」

それは誰の所為だと問いただしたかったが、それじゃ話が進まない。

「そつだ。で、お前は？」

「……………にああ、同じ。散歩」

「へえ、何も持たずに制服一つでか？第一、七月だからって、まだ夏服だと寒いだろ」

「……………瑞希には関係ない」

関係無い、か。

さあ、ここからどう説得していこう。

「じゃあここで一つ質問。希はさ、ここに人を探しに来たんだろ？探さなくていいのか？」

まあ、この町に来た方法は乙女さんに拉致られてだけ。

「・・・にゃあ、もういい。見つかった」

「そうか。なら二つ目。お前、施設の人に何か言ってから来たか？」

「っ！・・・知ってた？」

「全部な」

いずれ霧谷希“という原作キャラ”に出会うであろうと思って、色々調べていた。

原作知識と言えど、細部までは書いてない事もあるからな。

施設の事。

施設長 村雨四摩子 の事。

そして、彼女自身の事。

「その反応、何も言っていないな」

「・・・」

「嫌気がさしたんだろ、施設に」

「違う」

珍しく、希がはっきりと否定した。

「何が違うんだ？」

「・・・これ以上人の迷惑になるのが、嫌」

「だから、施設を出たと」

「・・・にゃあ。そう」

「何があつた？話せる事があるなら聞くぞ？」

「・・・」

そして希は、ぼつぼつと語り出した。

希から聞いた昔話は、俺が調べた事や知っていた事とほぼ同じだった。

第四村雨学園という孤児育成施設。

『村雨』の名字を得るという学園最高の栄誉。

そこに手が届くという嬉しくもない事実。

その裏で沢山の仲間が泣いているという事。

そこで気付いた“自分がみんなの欲しい物を奪い続けていた”という現実。

「……………だから、もうここにはいられない。また“何か”を奪い続けるから」

「……………」

この時俺は、悲しむでもなく、憐れむのでもなく、ただ純粹に。嬉しかった。

十年ぶりに会話をした人間に、ここまで自分の心の奥底を語ってくれたのだから。

なら俺も、本気で希に教えなければならぬ。

彼女の勘違いと家族という大切な存在を。

「なら、聞いたのか？」

「……………?」

「巧に、乙女さんに、芹沢に、梅ノ森に、大吾郎に、家康に、鳴子に、優さんに、『自分は迷惑をかけているか?』って。

俺は迷惑だなんて思っていない」

「……………にゃあ、聞けない」

「じゃあそれは、ただ嫌な事や辛い事から逃げてるだけだ」

人の事なんて言えない。
でも、言わなきゃいけない時がある。
その時が今だと、俺は思っている。

「第一、家族つてのは迷惑を掛けあいながら生きていくものだろ？」
「・・・・・・・・・・家族？」

「そう、家族。血の繋がりがなくなつてなれる、法にさえ縛られない唯一無二の“絆”」

「・・・・・・・・・・私が、家族？」

「巧や乙女さんと一緒に過ごしてて、心が温かくなつたり、安心したりする事が無かつたか？」

「・・・・・・・・・・にゃあ。あつた」

そうか。

“あつた”か。

「なら、もう希は巧達と家族だ」

「・・・・・・・・・・にゃあ、でも」

「不安か？なら本人に聞けばいいじゃないか。まずは聞く事。そこから始めてみるよ」

「・・・・・・・・・・（こくり）」

「よし、分かつたならもう帰ろうか。寒いし、巧が心ば「瑞希！大変なんだ！希が・・・・・・・・って、希！？」遅かつたか・・・・」

只今の時刻、5時18分。

気が付けば、三十分近く店の前で喋っていた。

そりゃ巧も起きる訳だ。

「巧、どうした？そんなに慌てて」

「いや、起きたら希がいなくて、それでみんなに連絡して、探すことになったんだけど」「バカ巧！そんなところに突っ立ってないで、希を探しに・・・って、希！？」「被害者第二号が・・・」ははは・・・」

これ以上ここにいと、被害者が続々と増えるだけだな。

「巧、俺達帰るな？詳しい事は希から聞いてくれ」

「あ、ああ、分かったけ」「巧！これはどういこと！希、ここにいるじゃない！」ど、文乃をどうにかしてくれ・・・」

「ガンバ。あ、それとお二人さん？」

「どうかしたか？」

「なによー！！」

「希から話があるから、真剣に聞いてくれ」

これが最後のお節介。
オレのぞみ
転生者から原作登場人物への、最後のエール。

「分かった。聞くよ、希の話」

「ふん。勝手に話せばいいじゃない」

「そうか。じゃあ心配ないな。帰ろう優さん」

「はい。それでは皆さん、また学校で」

そのまま家に帰ろうとしたら、希が手を掴んできた。

「・・・・・・・・・・瑞希」

「ん？」

「・・・・・・・・・・ありがとう／＼／／」

「どういたしまして」

掴まれた手で希の頭を撫で、俺と優さんはその場を後にした。
さて、家に帰って登校準備でもするかな。

「一旦家の中に入ろうか」

「話、早くしてよね。学校があるんだから」

「・・・・・・にゃあ、分かった」

「まあ、それはともかくとしてさ、疑問があるんだけど」

「・・・・・・にゃあ？」

「なんで瑞希って、いつも藤倉と一緒にいるんだ？」

「幼馴染みとかじゃないの？」

「何か聞いてるか？希」

「・・・・・・にゃあ。何も」

「ほんと、二人の関係って不思議だよな」

「へくしょん！」

「風邪ですか！？」

「いや、たぶん俺の事を誰かが考えてるんだろ」

希とか巧とか芹沢とか。

「ごめんな優さん。まだ言えないんだ、何も。俺がきちんと覚悟してから言いたいんだ、全て。それまで」はい。待ちます」

「私は、瑞希さんのメイドですから」

「・・・・・・敵わないな、優さんには」

これからも、優さんにはお世話になるんだろうな。

そんな事を考えてると、申し訳ない気持ちでいっぱいになりそうだった。

でも、言ってくれたんだ。

「信じています」って。

だから、こんな事を考えてる時点で、優さんの信頼への侮辱なんだろうと思う。

ありきたりな考えだけど、すごく実感した。

強く、ならなきゃって。

「（施設、ですか・・・）」

「どうかした優さん？」

「いえ、なんでもありません」

「そう？ならいいんだけど・・・」

そう、たとえ些細なことでも、優さんから相談を受けれるくらいには、強くなりたい。

第6話 キミノキモチ／オレノオモイ（後書き）

ようやく一巻が終わった（泣）

さて、ここでアンケートを取りたいと思います。

オリキャラ紹介を書いてほしいか、書かなくていいかのアンケートです。

前に活動報告で聞いたのですが、そのときに「書かない方がいい」という意見を書いてくださった方がいたのですが、その後、小説の感想に「オリキャラの性格がわからないので、紹介を書いてほしい」という意見も出たので、迷ってしまい、アンケートを取ることにしました。

『書いてほしい』という方は、瑞希と舞華と雄太のCVも考えてくれると嬉しいです。

それと、今回のシリアスの書き方や雰囲気などの感想もお願いします。

感想や誤字脱字、アンケートなど待ってます！

第7話 メイドにはデフォルメで四次元ポケットがついている（前書き）

本当に遅れてすみませんでした！！

かなり間を開けてしまったので、前作と書き方が変わっているかもしれない。

是非指摘してやってください。

それでは、どうぞ！

第7話 メイドにはデフォルメで四次元ポケットがついている

「なんだか長い間眠っていた気がするよ」

「そうですね。そんな気がします」

「アレだな、暴走して凍結されたんだろ」

「んなエ アみたいな事があつてたまるか」

「・・・ふあ・・・」

「ああ、もう！希が起きちゃったじゃない。バカ巧！」

「いや、今のは都築にはあまり関係が無いと思うのだが・・・」

「第一、あたしの下僕に勝手に叱らないでくれる？」

「まあまあ、一旦落ち着こうぜ」

「そうですね。鳴子様の言う通りです」

「「「「「誰？」」「」「」「」

「「「「「なんでここに!？」」「」

「夢か・・・」

おはようございます。いきなり夢オチでテンションダダ下がりの瑞希です。

希家出（未遂）事件から数日が経った（もつと経っているような気もするけど・・・）。

あの後、希が自分から巧達に自分の思いを話した。

勿論と言つべきか、巧達はそれを受け入れてくれた。

結果、希は前と同じように都築家に居候という形で収まったのだが、重大な事（一部を除く）が残っていた。

「一学期末試験はどうするの？」by宮小路瑞希

俺と優さんは既に高2までの内容まで全て終わり、今は高3の勉強をしているからおk。

家康は意外にも、かなり頭が良かったりする。その分色々残念だけど。

希は言わずもがな。確か前の抜き打ち実力テストで、満点を取った3人の内1人らしい。後2人は察してくれ。

芹沢、梅ノ森、鳴子も頭がいい方である。

さて、ここで問題。

あと誰が残ってる？

七月某日（平日）

放課後。

そんな訳で、只今大吾郎と巧に調きよ・・・勉強を教えている。教えている・・・はずなのだけれど。

「そうじゃなくて、ここ。もっと、この辺を重点的に・・・ね？」

「ああんもう、違う違うう、さっき教えた通りにやらなきゃ」

「・・・焦っちゃだめ。リラックス」

なんだこれ。

巧の右肩から芹沢が覗き込んでいて、

巧の左膝に梅ノ森が座っていて、

巧の正面で希が椅子を前後逆にして座っている。

3：1で教えているのは別にいい。問題はそこじゃない。

お前ら、巧に近すぎ。

そのせいで、巧の体のあちこちに女の柔らかさが押しつけられている。

あれは絶対に集中できないだろう。

え、他の奴らは？

家康は大吾郎専属のコーチ。

優さんは鳴子と勉強。

俺は積みラノ消費中。

「そもそもっ、この状況がおかしいのよっ！」

遅いんだバカ。

その話題は十行前に終わったんだよ。

「船頭多くして船山に登るっ！教える人間が、2人も3人もいたら混乱するじゃない！」

そこは問題が無いんだよ。問題なのはメンバーだ。

もっとな問題は、それを芹沢に向けて言う事。

また面倒臭く「そう思うんなら、そっちが身を引けばいいじゃん。

巧の面倒はあたしが見るからっ！」

あーあーあーあー。

「さあ始まりました巧くん争奪戦！司会わたしは私、鳴子叶絵がお送りします！実況はこの人。学園初の親衛隊を持ち、その美貌で男女問わず虜にする。【お姉さまとお呼び！】宮小路イ、瑞きゅっ！」

「ポニテぶち抜こうか？」

来ると思ってたよ司会なるこ。

第一、それはレスラーの紹介だ。

「うつゝ痛いぜよ」

「ポニテ引つ張りの刑だけで済んだ事を光栄に思っんだな」

「優ゝ！あのロン毛がいちゝめてきたゝ」

「はいはい。大丈夫ですよ叶絵さん」

あ、優さんそっち側なんだ…。

つて、二人ともいつの間にそんな仲良く？

「（瑞希！）」

ん？

「（瑞希　！）」

念話？

「（・・・この女装癖）」

「（いい度胸だ。お前の店燃やしてやろうか？）」

気が付けば、巧から視線で救難信号が送られてきた。

「（頼む！この二人の間から出してくれ！）」

「（ヤ）」

「（HELP!）」

「（Sorry）」

「（お願い!）」

「（だが断る）」

誰もあのツンデレVSタカビ　の間に飛び込もうなんて思っ勇者はいない。

勇者30でさえ匙を投げるほどの火花が^{メラソーマ}あちらこちらに。
飛び火を食らうのは目に見えている。

「（それより巧君。俺より左右の耳を気にした方がいいのでは？）
（え？）いだだだだだッ！！な、なんだよっ！？」

巧がゆつくりと後ろを振り向くと・・・

そこに、般若の顔二つ。

美哉さんも顔負けレベルの。

「いい度胸ね？人が親切で勉強見てあげようって時間とった上に、
アンタのことで揉めてるのに、瑞希に見蕩れて鼻の下伸ばしてるな
んで。いい度胸としか言い様がないわ」

待て、理由がおかしい。

「誰の為に、このうつさい生意気女と言い争ってると思ってるの。
いくらあたし直属の下僕でも、そーゆー態度は肅清の対象ね」

どーゆー態度？

というか直属の下僕とか（笑）

「第一、なんで瑞希なの・・・せめて藤倉や希だったら許せたの
に・・・（ポソッ）」

「そこに関しては同意よ・・・くっ、これだから男の娘は（ポソッ）」

「ハリセン」

「はい、どうぞ」

何故優さんがハリセンを持っているかはスルーさせてもらおう。

今は・・・コイツ等だ。

「ま、待ちなさいよ！べ、別に本気で言ってる訳ないじゃない・・・」

「そ、そーよ！ちよつとしたジョークじゃない。あ、あはは・・・」
「ならこつち向けや」

決まっ たな。

判決は【禁則事項です】

「ちょ・・・」

「待つ・・・！」

パパンッ！

数日後。

テスト期間が終わり、クラス中がたればんだみたいになっている頃、
妙にうざったい奴が現れた。

「おうおうおう、イチャこらいチャこら見せつけてくれるじゃねー
かよお」

モヒカンに、肩に棘のついた革ジャンを素肌の上から着ている家康^{クンむし}
と、家康と同じ格好をしている大吾郎だった。

正直、見てて辛い。

目も心も。

「ねー優さん、あいつらを秘剣燕返しでマミってー」

「分かりました。では……秘剣！（シャキン）つb「待て」「
何故出来るんだ。

そしてその物騒な小太刀を一旦床に置いてどうか。

「あのね優さん。メイドだからって、何でもしていいって訳じゃな
「ヒャーハッ！新参者にはオレ様が特別にこのルールを教えて
やるぜ！」「」

イラッ ミ

「ねえ巧、殴っていい？」

「まあ落ち着け」

「俺が許可する」

「おい瑞希」

「ジョウダンダヨタクミクン」

「ならその手を離してやれよ……」

只今俺の右手は革ジャン世紀末戦国大名の胸倉を掴んでおりま
す

「お前に二つの未来をやろう。

要件を手短に話して死ぬか、

お前を長々と蹴って殺すか、

さあ選べな！」

「瑞希さん色々と崩壊してます」

うるさいよ優さん。

こっちもテスト明けでダルいのに、さらにコイツ等が来るなんて。
そりゃキャラ崩壊もするさ。

『瑞希のキャラ？ハハッ、そんなもの7話にして定まってなブヒョッ』

(ム。(G||(^^瑞) 黙ろうか。

「う、梅ノ森がお前達を屋上に呼んで来い、と・・・」

「そうか、御苦労。ほい、芹沢」

無造作に投げ捨てる、と見せかけて、ちょうど良く決まる位置に革ジャン世紀末(r yをパスする。
期待してるぜ？

「任せなさい！」

そんな俺の心の声を聞いたかのように、芹沢は革ジャ(r yの鳩尾に自分のつま先をinした。

「二回死ねっ！！」

「くぎゅっ！」

か(r yは一部で有名な感染症の名を叫びながら、掃除用具ロッカーに叩きこまれた。

芹沢が全略をシューウウウウウウウウト！

「あー、スッキリした」

彼女の顔を見た巧は後にこう言ったという。

『あれほどの笑顔はそうそう見れない』

第7話 メイドにはデフォルメで四次元ポケットがついている（後書き）

なんとも言います。自分は家康が好きです（笑）。

というか場面が全然動いていないですね・・・

鳴子の口調やセリフが一部おかしかったので編集しました。

次回はいつになるかわかりません（前からでした）。

一ヶ月以内には投稿したいです。

あ、ツイッタ 始めました。よければ見てください。

<http://twitter.com/#!/sirubari>
on

次は屋上から。

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8811m/>

残念すぎる最後を迎えた男の物語

2011年8月13日15時38分発行